

翼の王国

ANA Inspiration of JAPAN

A STAR ALLIANCE MEMBER

1

January 2026
No.679

ANA グループ機内誌
The Inflight Magazine
of ANA Group

モロッコ 青の軌跡

足利
毘沙門さまに福をいただく

翼の流儀
氷上で戦う“ANA社員”
姉妹アスリート



Web「翼の王国」はこちらから

TSUBASA GLOBAL WINGS
click here! 点击这里!



ご自由にお持ち帰りください。

HAPPY NEW YEAR 2026

旧年中は格別のご愛顧を賜り、誠にありがとうございました。

皆様にとって笑顔あふれる一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。





写真／宮澤正明(モロッコ:シャウエン)



写真／宮澤正明(足利:行道山淨因寺)



写真／原ヒデシ(千葉:九十九里)

1 翼の王国

2026
JANUARY

C O N T E N T S



表紙／モロッコ:シャウエン(写真／宮澤正明)

山あい広がる青の街並みは、モロッコ随一の観光名所。青のグラデーションが街全体を覆う色彩の迷宮は、訪れる人の心に深い余韻を残す。

- 003 ごあいさつ
- 006 オリチャ“精霊”占い2026
サンテリア最高司祭 ロベルト・コッシー
- 013 社員が見つけた! Local Premium通信
- 016 旅の出会い オランダ:ヘーレンフェーン／佐藤綾乃
- 018 まだ答えのない絵はがき／松丸亮吾
- 020 特別編:東京の空の下で／国枝慎吾
- 特集**
024 **モロッコ 青の軌跡**
Moroccan Blue Journey
- 042 花、旅、人 ダリア／赤井勝
- 044 快適な空だけの旅 中部国際空港／パラダイス山元
- 特集**
046 **足利**
毘沙門さまに福をいただく
- 062 新連載 湯気地図 長野:菱野温泉／笹野美紀恵
- 064 旅するお取り寄せ 佐賀／古賀及子

- 066 **翼の流儀** A New Ambitious Story
氷上で戦う
「ANA社員」姉妹アスリート
- 072 ニッポン47妖怪さんぽ
カナダマ:富をもたらす千葉の妖怪／森井ユカ
- 076 今月のニッポン推し 北秋田市×本部町
- 080 おべんとうの時間
群馬:NPO時をつむぐ会／阿部了・阿部直美
- 084 ライト、フライト 運命の旅／紅甘
- 090 郵便飛行
- 091 アンケートご協力をお願い
バックナンバー販売のお知らせ
- 092 ANA GROUP INFORMATION
- 104 ANA STORE@SKY案内
国際線機内販売 商品ラインアップ
- 112 機内オーディオ/ビデオ番組案内
- 114 ANAグループ航路図

『翼の王国』の舞台裏へ潜入!
ANA公式YouTubeはこちらから



翼の王国 No.679 2026年1月1日 発行:ANA『翼の王国』編集部 〒105-7140 東京都港区東新橋1-5-2 発行人:全日本空輸株式会社 制作:株式会社 光文社
 編集統括:田邊浩司 編集人:川原田朝雄 スーパーバイザー:山下マヌー 編集:中野桜子、山下美咲、仲本剛、服部広子、小嶋美樹、高田真莉絵、齊藤素子、富岡幸子
 デザイン:カメガキデザインオフィス／松澤順一郎、石川直美 スタジオギブ／山本雅一、野崎二郎、近藤礼彦
 トリムデザイン／塚原敬史 attik／橋田浩志 横山希
 編集協力:株式会社キャストネット／川元賢司、所裕子 翻訳:KPS 印刷:共同印刷株式会社
 【記事に関するお問い合わせ】株式会社 光文社 tel 03-5395-8225 tsubasa@kobunsha.com
 【広告に関するお問い合わせ】ANA X株式会社 ライフサービス事業推進部 ml_notice_anamedia@ana-x.co.jp
 ©All Nippon Airways / Kobunsha2026 本誌掲載の写真・記事の無断転載および複写を禁じます。本誌に記載されている価格はすべて税込み価格です。

●毎月1日以降に表紙や各ページのQRコードからリンク先への遷移が可能になります。

毘沙門さまに
福をいただく



足利

鬼を福に変える祈りの地に

263年ぶりに

姿を現した北の守護神

室町幕府を開いた足利氏の発祥地として、いまでも歴史の層が色濃く残るまち・足利。

山上にそびえる大岩山では、日本三大毘沙門天の一つが263年ぶりに出開帳でかいちゆうされた。

豆まきの起源とされる「毘沙門天の夢のお告げ」や、

2021年の山林火災であらためて現れた結界伝説、さらには多くの文人墨客が逗留とまりゆした旅荘――。

祈りと文化が重なり紡がれた歴史の道をたどれば、
いまだけ開かれた特別な扉の前に立つ旅へと、自然と心が誘われる。

写真／宮澤正明 取材・文・編集／服部広子 雲海写真／中井誠（P58～59）





標高440mの行道山の中腹に創建された行道山浄因寺は、関東の高野山とも称される景勝地。巨石から巨石へと架かる清心亭（上・右写真）への「天高橋」は、葛飾北斎が『足利行道山くものかけはし』として描いたことでも知られる。行基の分骨を納めた「寝釈迦仏」も名高い。一方、「大岩山多聞院最勝寺」は、関東屈指の霊山・大岩山に建つ名刹。745年、行基が聖徳太子作と伝わる高さ約5.4センチの純金の毘沙門天を安置するために創建したとされる。行基が自らを彫ったと伝わる行基像も収められている（左下写真）。

行道山浄因寺

栃木県足利市月谷町1579

<https://www.ashikaga-kankou.jp/spot/jouinji>

※清心亭は、寺院の年中行事にあわせて随時公開されています



足利には、奈良時代、仏教の民間布教に尽力した高僧・行基ゆかりの古寺が三つ残る。なかでも最も歴史が古い「行道山浄因寺」は、山に抱かれるように静かに佇む姿が印象的だ。

365段の石段を登るほどに森の気配は深まり、参道沿いには3万3千体もの石仏が静かに並ぶ。足元に群生するシヤガは人の手で植えられたものだと、同じく行基が開創した最勝寺の副住職・沼尻了俊さんが教えてくれた。「昔、この道を多くの人が往来した証です」――。

境内へと進むと、巨岩の上に建つ「清心亭」が姿を見せる。江戸の浮世絵師・葛飾北斎も描いたと伝わる茶室からは、幾重にも重なる山の緑の向こうに、筑波山の稜線が淡く浮かぶ。一幅の絵のように溶け合うその眺めが、旅人の心をそっとはどいていく。足利にはそんな絶景がある。

行基の足跡をたどる
足利の静謐^{せいひつ}なる山寺へ







山火事の際、毘沙門天像は町の人々の協力で避難。火は食い止められたものの、江戸時代に彫られた像の傷みは激しく、京都の国宝修理所で3年かけて修復された。その過程で、仏像には珍しい杉材が使われ、“うづくり”や“焦がし”の技法により顔の表情や衣服の質感まで木目で巧みに表現されていることが判明。修復には寺の御神木の杉が用いられ、毘沙門天、妃の吉祥天（右ページ写真右下の像）、息子の善膩師童子（右ページ写真左下の像）の3体がいぎいきと甦った。

奈良の大仏建立に奔走した行基が、夢のお告げに導かれて大岩山に毘沙門天を祀った——それが西暦745年。都から見れば果ての地だった関東の北端に、人々を救う「守護神」が置かれた。鎧をまとい鬼を踏みつける勇ましい姿は災いを払い、福を招く存在として人々に広く信仰され、日本三大毘沙門天の一つとして知られるようになる。

毘沙門天は夜叉（鬼）の大将とも呼ばれ、数千万の夜叉を率いる守護の将であり、災害や疫病が人々を脅かすと、目には見えぬ配下を遣わして救うとされる。その力は日本文化にも深く根つき、実は節分の豆まきも毘沙門天の夢告が起源と伝わる。鬼の「魔の目」を「豆（まめ）」で射て魔を滅する——言霊を重んじる日本人の感性から生まれた風習だ。炒り豆を使うのは、落ちた豆から「魔の芽」が再び芽吹かないようにするためである。

大岩山最勝寺では節分の法要が一年で最大の行事。ここでは「福は内」のみを唱え、鬼を追いつけ、出さない。各地で行き場を失った鬼を迎え入れ、毘沙門天の前で改心させ、福を運ぶ「福鬼」として送り出すためだ。毘沙門天は七福神随一の福德を持つともされ、恵みを託された福鬼は、人々のもとへ福を届けに向かう。約5年前に発生した山火事で、秘仏の毘沙門天像が避難のためその姿を現した。修復を経て再び山上に戻った毘沙門天は、荒ぶる力を鎮め、福をもたらし存在として、いまでも足利の人々を静かに見守り続けている。



大岩山多聞院最勝寺
栃木県足利市大岩町570
<https://www.oiwasan.or.jp>



←大岩山毘沙門天では、金剛力士像などの文化財修復事業のための勸進のご協力をお願いをしております。御寄進についての詳細はこちら



土木博士の 副住職が見つめる 祈りの地形——結界の記憶

足利長尾氏の三代目・長尾景長が、両崖山に築いた山城（足利城）の7つの登り口に弁財天を祀り、見張りの兵を置いたと伝わる「長尾七弁天」。表鬼門の守護「小谷辨財天」、美人弁天と親しまれる「明石弁天」（ともに本城）、本経寺の静かな境内に佇む「子安辨財天」（上写真）、そして明治の神仏分離を経て長林寺から通6丁目へと遷された「巖島神社（通称・長尾弁天）」（下写真）など、かつての祈りの名残は、いまも町の随所にそっと息づいている。



「足利は、風水的に非常に恵まれた土地なんです」。そう語るのは、最勝寺の副住職・沼尻さん（前出）。山並みに抱かれ、町の中心を渡良瀬川が流れ、かつては海も近かったという豊かな地形が、縄文の昔から人々の営みを支えてきた。

行基が訪れた当時の坂東（関東）の地は、まだ人々が竪穴式住居に暮らし、前方後円墳などを築いていた古墳時代の直後だった。現在、足利一帯からは1300基以上の古墳が確認されている。

「これほどの数が密集しているということは、この地域がいかに栄えていたかの証拠です」

そんな沼尻さん自身、京都大学大学院で土木工学を学び博士号を取得した、いわば街の構造を読み解く専門家でもある。

「日本では、古くから土木の知恵を最も持っていたのが僧侶で



した。行基も空海も、治水やまちづくりを担っていたんです」

その視点で足利を眺めると、土地を包む見えない層（結界）が浮かび上がる。

「足利には、時代ごとの祈りが幾重にも重なっています」

古代から中世にかけては、権力争いや戦とともに呪詛じゆそによる攻防が実在した時代。源氏の治世で栄えた足利に社寺が多いのも、そうした歴史の名残だという。

関東地方を震撼させた平将門伝説にまつわる寺社、足利城（現・両崖山りやうがいさん）を守護する七弁天。そして近年の山火事が、偶然にもその弁天が張る結界のラインで鎮まり、町への延焼を免れまぬがたという逸話が加わった。

渡良瀬川は、かつて水運の道として、軍事の要衝として人と想いが行き交った場所だ。その静かな流れには、時代を超えて積み重なった祈りの余韻が、たゆたうように漂っている。

蕎麦と器。足利に息づく、継承の手

足利の町に根を張り、それぞれの手仕事を守り続ける二人がいる。一人は蕎麦処「蕎遊庵」の店主・根本忠明さん。もう一人は陶芸家の柳川謙治さん。

根本さんは、コーヒー店主から蕎麦職人へと転身。「蕎聖」と呼ばれた一茶庵創業者・片倉康雄氏の教えを受け継ぎながら、十割更科蕎麦^{じょうぼん}さらしな生一本^{いっぽん}の技を極めた。「更科蕎麦が打てて、二八蕎麦（並蕎麦）の完成」と、道具作りから蕎麦打ちまで日々手を動かす。師に言われた「自分で使うものは自分で作れ」という教えを麵棒や包丁作りにも生かし、手元の道具一つひとつに心を込める。

一方、柳川さんも足利の土と向き合う。陶芸の修業を経て、地元の粘土を選び、日々試行錯誤を重ねる。「足利萬古^{ばんこ}」と呼ばれる江戸後期の焼き物の伝統に触れつつ、土を掘り、砕き、水

1982年、足利市生まれ。専門学校を卒業後、家具修理の仕事に携わるなかで“ものづくり”への思いを深め、人の勧めを受けて京都の陶工訓練校で学び、村田森氏に師事。2012年に独立し、地元へ戻って作陶の道を歩み続けている。やわらかな質感と温もりを宿した器は、和洋中いずれの料理も美しく引き立てるとしてプロの料理人からの信頼も厚い。



柳川謙治（店名：やながわ）
栃木県足利市相生町385
<https://k-yanagawa.jp>
Instagram @yanagawa.kenji





を加え、焼き上げる。完成まで予想できないところも面白い。「器は、料理が盛られて完成する」と語る柳川さんの器は、日常の食卓で料理を受け止め、使う人との対話を生む。

蕎麦と器。異なる手仕事の中にも共通するのは、継承の重みと楽しさだ。根本さんは教室で生一本の蕎麦打ちを伝え、柳川さんは足利の土の可能性を模索する。どちらも先人の知恵に触れ、自らの手で形にすることで、技を次の時代へとつなぐ。

「足利は神社仏閣が多い。日本蕎麦が食文化として根づいたのも、そうした歴史と結びついているからでは」と根本さん。

二つの手仕事は交わらないようで、同じ風土を背に、同じ思いを抱く。足利という土地で磨かれた技は、形や味を超えて人々の心に根を下ろし、時代の移ろいとともに息づいている。

足利の街並みを見渡す織姫山の中腹に建つ「蕎遊庵」。江戸前ならではのつるりとした食感の打ち立て蕎麦や、季節の変わり蕎麦が楽しめる。名物の“さらしな生一本”は、太さ0.5ミリの細麺を1〜2秒でさっと湯がく繊細な蕎麦。根本さん曰く「熱や乾燥にとっても敏感で、ほんのわずかな違いで切れてしまう」ため、提供する店は全国でもごくわずか。蕎麦打ち教室は予約制。



蕎遊庵

栃木県足利市西宮町2549

<https://www.kyouyuuan.com>



悪縁を断ち、良縁を呼び込む 日本一の縁切り稲荷



門田稲荷神社

栃木県足利市八幡町387

<https://enkiri.jp>



1056年、源義家が奥羽追討の戦勝を祈願して「下野国一社八幡宮」を創建した際、境内にともに祀られた稲荷社。男女のことに限らず、病や酒、賭け事など、さまざまな“縁”を断ち切りたいと願う参拝者が後を絶たない。



祈りのまちに育まれた 旧家の伝統漂う文人の宿

巖華園
栃木県足利市月谷町 8-1
<https://gankaen.com>

たにぶん ちやう
谷文晁が作庭し、渡辺華山が名づけた庭園は、自然の岩に華を添える造形美で知られ、栃木県初の名勝に登録されている。葛飾北斎が行道山を描いた『くものかけはし』（右下写真）や南画家・高隆古の屏風『富士巻狩図』など、文化人たちが遺した貴重な作品も多数収蔵されている。



鳥居が連なる門田稲荷神社は、日本一の縁切り稲荷として知られる。悪縁を断ち、良縁を招く信仰はいまも息づき、訪れる人々は祈りを通じて自らの心と向き合う。人間関係の悩みに対して、「神様に頼るのではなく、自分自身で解決することが大切」と宮司・尾花章さんは説く。

その祈りの空気は町の文化にもつながる。足利氏ゆかりの旧家・巖華園^{がんかえん}には江戸時代から高野長英など文人墨客が寄寓。戦後、社交クラブとして発足し、のちに旅館となつてからは、檀一雄、坂口安吾ら文士や岡本太郎、森繁久彌なども逗留していた。

朱の鳥居や神社仏閣、庭園や歴史建造物が織りなす街並みは、祈りと文化が静かに交錯する景色を映す。祈りに育まれた町だからこそ、訪れる人々は心静かに、自らの創作や思索と向き合うことができるのだろう。

霊峰を見つめる毘沙門天――

千年の祈りが宿る足利、日本を照らす祈り

雲海がそつと大地を抱く朝、目覚めの前の一瞬だけ夢のような時間が訪れる。白く沈む街並みのはるか向こう、東京の影が淡く滲み、そのさらに彼方^{かなた}には、静かに富士が姿を現す。

江戸のころから秘仏として御堂に納められてきた毘沙門天。今回の出開帳によって、仏師の

名が判明しただけでなく、尊像がわずかに度だけ右を向いていたことも明らかになった。なぜ正面ではなかったのか――その視線の行き着く先を探したとき、浮かび上がったのは江戸時代に噴火した富士山だった。

3月、毘沙門天は再び御堂へ戻る。しかしその目が捉えるの

は、遠くの霊峰だけではない。聖徳太子や行基が紡いだ、国の平和への祈りを託されて、災害や疫病、貧困に苦しむ人がいないようにと、広く世界を見渡している。この足利というまちに1280年、脈々と受け継がれてきた祈りの心は途切れずに続いていく。



足利への翼

足利へはANA便で羽田空港へ。
羽田空港から首都高、東北自動車道を経由して
北関東自動車道で「足利 IC」へ。

※運航情報は変更になる可能性があります。
最新の情報はANAウェブサイトをご確認ください。



「足利特集」はWeb『翼の王国』でも
お楽しみいただけます。
本誌未掲載のWeb限定記事も
ぜひご覧ください。

市の中心部から車で15分ほどの大岩山天空西公園にある「天空テラス」。
標高310mの高台からは関東平野が一望できる。クマ出没には要注意！